



# 初級日本語教科書における副詞の導入実態について

朴, 秀娟

---

**(Citation)**

神戸大学留学生教育研究, 3:21-34

**(Issue Date)**

2019-03

**(Resource Type)**

departmental bulletin paper

**(Version)**

Version of Record

**(JaLCOI)**

<https://doi.org/10.24546/81011159>

**(URL)**

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81011159>



〔研究ノート〕

## 初級日本語教科書における副詞の導入実態について

朴 秀娟

キーワード：副詞、日本語教科書、初級、導入

## 1. はじめに

副詞は、円滑なコミュニケーションを行う上で重要な働きをすることがあるにも関わらず、日本語教育においては、十分な指導がされているとはいいがたい。「あまり（おいしくない）」、「もし（100万円あったら）」、「いくら（飲んでも）」のような、一部、特定の文法形式と共起する副詞を除いては、特段に取り立てて指導されることは少なく、多くの副詞が語彙の一つとして導入されるだけに留まっているのが現状である。副詞が取り立てて指導されることが少ない点については、大関（1993）、小寺（2000）などでも指摘されている。

しかしながら、日本語学習者にとって副詞を適切に使用することが容易であるかといえば、必ずしもそうではない。次の例に見られるように、副詞の誤用は、学習者の日本語能力を問わず観察される。（誤用例は、「日本語学習者作文コーパス」より<sup>1</sup>。末尾の括弧内に、同コーパスにおいて示されていた学習者の母語、学習歴、レベル判定を示す。なお、括弧内の矢印先に示されているものは、同コーパスにおいて正用例として提示されていたものである。）

- (1) 家で勉強はよく（→あまり）しないんですが、学校の授業はがんばって聞いています。（韓国語・2年未満・初級）
- (2) 卒業してから、必ず（→きっと）ぺらぺらと話せると思いきや、三年生になってまだいろいろな問題があります。（中国語・2年以上5年未満・中級）
- (3) ある人はもう（→ $\phi$ ）電字ブックが売り初めたら本屋もなくなるだろうと言うが、私はそんなことはないと思っている。（韓国語・5年以上・上級）

これらは、先に述べた「あまり」、「もし」、「いくら」のように、特定の文法形式とともに指導されるというよりは、一語彙として意味が説明されるだけに留まっていることが多い副詞であるように思われる。しかし、これらの副詞も、上の誤用例

を見る限り、使用される構文において何らかの特徴があることが考えられ、文法的な指導が必要であると考えられる。また、例3の「もう」は初級で導入される副詞の一つであるが、上級レベルの学習者でも適切に使えるとは限らず、それができるようになるためには指導が必要であることが窺える。

本稿では、このような現状を踏まえ、現行の日本語教科書において、副詞がどのように扱われているのか、とりわけ、初級教科書における副詞の導入実態について述べることを目的とする。小矢野（1984）でも述べられているように、学習者の日本語能力や、教科書の内容が異なれば、指導すべき、また取り扱うべき語彙項目も異なってくることが考えられる。本稿では、初級教科書では共通の文法項目が多く取り上げられているという点<sup>2</sup>、また、上級レベルの学習者にも初級レベルで導入される副詞の誤用が見られるという点に注目し、初級の総合教科書を対象に調査を行う。具体的には、初級の日本語教科書においてどのような副詞が取り上げられており、また、それらの扱われ方にどのような特徴が見られるのかについて述べていく。

以下、2節では、日本語教科書における副詞の導入と関連して従来どのようなことが指摘されているのかについて述べる。続く3節では、調査資料について述べ、考察の対象となった副詞の選定基準について説明する。そして、4節では、初級教科書において導入されている副詞のリストを挙げ、そこから見えてくる特徴について示し、5節で、これら副詞の扱われ方に見られる特徴について述べる。最後に、6節では、本稿のまとめと今後の課題を示す。

## 2. 日本語教科書で扱われている副詞に関する調査

日本語教科書を対象に副詞の調査を行っているものに大関（1993）がある。大関（1993）では、初級、中級、上級レベルの日本語教科書で扱われている副詞について、いわゆる副詞の三分類（陳述副詞・程度副詞・情態副詞）を一つの指標に傾向を探り、次のような特徴があったと述べている。

まず、多くの初級教科書では、程度副詞が最も共通して見られた副詞だったという。初級教科書で扱われている副詞を、専門教育出版編集部テスト課編（1991）で挙げられている副詞語彙及び、甲斐（1983）で挙げられている国語教科書の副詞語彙リストの内訳と比較し、専門教育出版編集部テスト課編（1991）と甲斐（1983）における副詞の比率が、おおよそ「陳述副詞：程度副詞：情態副詞 = 3 : 1 : 6」であったのに対し、初級教科書16冊のうち、13冊以上に共通して見られた副詞（21例）の

比率は、「陳述副詞：程度副詞：情態副詞 = 3.8 : 4.8 : 1.4」であったとしながら、初級教科書では程度副詞が最も多い割合を占めていたと述べている。

程度副詞の次に高い割合を占めているものとして陳述副詞が挙げられているが、それは、初級教科書では、文型とともに陳述副詞が提示されることが多く、基本文型と呼応する陳述副詞の比率が高くなっていることによるものではないかという。その例として、「なかなか」の場合、「バスがなかなか来ない」のような陳述副詞用法と、「なかなかいい」のような程度副詞用法があるが、ほとんどの初級教科書が、前者の陳述副詞用法の「なかなか」を先に導入しているということを挙げている。大関（1993）は、「なかなか」の実例の使用例を集め、実際の使用実態においては両用法間に偏りは見られなかったとし、初級教科書で程度副詞用法よりも陳述副詞用法が圧倒的に多くなっているということは、初級教科書では副詞が文型とともに提示されていることを示していると述べている。

そして、1冊のみにしか出てこなかった副詞については、情態副詞が占める割合が高いとし、情態副詞の場合、教科書によって扱い方にばらつきが見られ、共通度が低いということを述べている。

なお、中級以上の教科書については、①新聞や小説など、生の日本語を使ったものが多く、出現語彙も偶然性の高いものであり、様々な性質を持つ副詞が扱われているということ、②「いささか」、「まして」、「もはや」、「どうせ」など、心情を反映するような副詞が扱われるようになってきているということが指摘されている。

大関（1993）は、個別の副詞に関する研究が多い中、日本語教育の観点から副詞全般について包括的に調査を行っているものである。しかし、25年前の調査ということもあり、調査の対象となっている日本語教科書が1963年から1992年の間に刊行されているもので、今から約25～55年前の教科書となっている。本調査では、近年刊行された日本語教科書を対象に調査を行い、大関（1993）で指摘されていることと比較しつつ、近年の初級日本語教科書における副詞の導入実態について述べ、調査の過程で明らかになった、副詞の扱われ方に見られる特徴について述べていく。

### 3. 調査方法について

本調査では、岩田（2011）を参考に選定した10冊（a～j）に、『J.BRIDGE FOR BEGINNERS Vol.1・2』（k）を加え、計11種類の初級総合教科書を対象に調査を行った。表1に、調査対象となった教科書の情報及び、本文中で言及する際の略語について示す<sup>3</sup>。

表1. 調査資料

	教科書	刊行年	略語
a	SITUATIONAL FUNCTIONAL JAPANESE Vol. 1・2・3 (第2版)	1994～1995	SFJ
b	日本語初歩 (改訂版)	1997	初歩
c	初級 語学留学生のための日本語Ⅰ・Ⅱ	2002	語学
d	JAPANESE FOR EVERYONE (改訂版)	2008	Everyone
e	日本語初級 大地1・2	2008～2009	大地
f	初級日本語上・下 (新装改訂版)	2010	初級日
g	初級日本語 げんきⅠ・Ⅱ (第2版)	2011	げんき
h	JAPANESE FOR BUSY PEOPLE Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ (第3版)	2011～2012	JBP
i	みんなの日本語初級Ⅰ・Ⅱ (第2版)	2012～2013	みんな日
j	文化初級日本語Ⅰ・Ⅱ (改訂版)	2013	文化
k	J.BRIDGE FOR BEGINNERS Vol. 1・2 (第2版)	2009～2010	JB

なお、本調査では、教科書において品詞が「副詞」として提示されているものだけでなく<sup>4</sup>、教科書の索引において一つの語彙として提示され、本文中で、動詞、形容詞<sup>5</sup>、副詞を修飾しているものはすべて副詞として扱い、考察を行った。そのため、「あるいて」、「きぶんでんかんに」のようなものも考察の対象となっている<sup>6</sup>。ただし、次のようなものは考察の対象から除外した<sup>7</sup>。

- ① 「今日、明日、来週、今月、来年」のような、時間名詞として捉えることもできるもの
- ② 「いっしょうにいちど、もうちょっと」のような、二語以上のくみあわせ

その結果、考察対象となったのは、計206語であった<sup>8</sup>。

#### 4. 初級教科書において導入されている副詞

初級教科書において語彙として提示されている副詞を、当該副詞を扱っている教科書の数、副詞のタイプ(陳述副詞、程度副詞、情態副詞)別に分類すると、次の表2ようになる。厳密に言えば、「たくさん」は「量副詞」、「だいたい」は、「概括量副詞」とも呼ばれ、「程度副詞」とは性質が異なるが(工藤1983)、大関(1993)では「程度副詞」に分類されていることから<sup>9</sup>、本調査でも便宜的に「程度副詞」に含めることとする。また、時間(例)「もうすぐ」、期間(例)「しばらく」、頻度(例)「ときどき」に関する副詞については、情態副詞として分類した。なお、「あ

まり]、「なかなか」のように、共起する述語のタイプによって異なる意味・用法を持つ副詞については、副詞の前後の括弧内に、共起しうる代表的な形式を示すことで区別して表す。

表2. 初級教科書において導入されている副詞

	陳述副詞	程度副詞	情態副詞
11種	あまり（～ない）、ぜひ	すこし、ちょっと、とても	いっしょに、いつも、すぐ、はじめて、ほんとうに、また、もう、ゆっくり、よく（分かる）
10種	ぜんぜん（～ない）、なかなか（～ない）	たくさん	いちばん、まだ、まっすぐ、よく（行く）
9種	たぶん、もし	ずいぶん	あとで、いっしょうけんめい、そろそろ、ときどき、はやく
8種	じつは、そんなに（～ない）、たとえば、ちょうど、どうぞ、もちろん	おおぜい、だいたい	あるいて、さっき、だんだん
7種	なにも、やっぱり	（なし）	きゆうに、じぶんで、できるだけ、とくに、はつきり、ひとりで、まず、やっと
6種	かならず、きっと、だれも、どうも	こんなに、たいてい、ほとんど	いちど、いつか、いろいろ、（朝から）ずっと、そのまま、なんども
5種	まるで（～ようだ）	いっぱい、かなり	いつでも、だれでも、どこでも
4種	いちども、おかげで／おかげさまで、せっかく、ぜったいに、たしか、とにかく、なんとか	あんなに、しょうしょう、（～より）ずっと、たいへん	あいかわらず、さきに、さきほど、しばらく、じっさい、たまに、みんなで
3種	いくら（～ても）、けっきょく、たしかに、たとえ、できれば、どこも、まったく（～ない）、わざわざ	けっこう、だいぶ	いまにも、いよいよ、おさきに、おそく、おたがいに、きちんと、さいごに、さっそく、じゆうに、すっかり、ぜんぶで、ちゃんと、とちゅうで、とつぜん、どんだん、まことに、むりに
2種	あんまり（～ない）、ちつとも、できたら、どうか、どんなに、なんだか、ひとりも、べつに（～ない）	すごく、とつても	かわりに、たがいに、ちょくせつ、ついで、のちほど、はやめに、ふつうに、べつべつに、ますます
1種	いがいに、いっけん（一軒）も、いったい、おそらく、かえて、けっして、さすがに、さっぱり（～ない）、すこしも、それほど（～ない）、たった、だれとも、どうやら、なるべく、なんか、なんとなく、なるべく、ひょっとして、まさか、めったに、もしかすると、やはり	いっそう、ひじょうに、ものすごく	いそいで、いちおう、いっしょう、うっかり、えんりょなく、おもいっきり、おもに、かんたんに、きほんてきに、きぶんでんかんに、ぐうぜん、ぐたいてきに、くたくたに、くわしく、こう、さらに、しかたなく、しっかり、じつと、しだいに、じどうてきに、じゅんばんに、じょうずに、じろじろ、しんけんに、すぐに、せっきょくてきに、そつと、たっぷり、たのしそうに、たびたび、ついでに、ついに、どうじに、とうとう、どうにか、ともに、はんたいに、ひそひそ、ひとりひとり、おじに、ふだん、べらべら、ほんきで、まえむきに、もともと、れいせいに、わざと

表2からは、次のようなことが分かる。

まず、多くの初級教科書において共通して取り上げられている副詞の内訳は、情態副詞が最も多いという結果となった。便宜的に、11種類中8種類以上の教科書において取り上げられている副詞をタイプごとに分類し、割合を示すと、次の表3のようになる（百分率は、小数第2位を四捨五入。以下同様である）。表3から、情態副詞が全体の約5割を占めていることが分かる。

表3. 8種類以上の初級教科書に共通する副詞のタイプ別内訳

タイプ	数
陳述	12 (30.0%)
程度	7 (17.5%)
情態	21 (52.5%)
合計	40 (100%)

甲斐（1983）でも述べられているように、類似した調査であっても基準が少しでも異なれば、比較が難しい。大関（1993）とも、副詞の認定基準や副詞の三分類の基準が異なっている可能性があるため<sup>10</sup>、単純な比較はできないが、大まかな傾向として、多くの初級教科書において最も共通して見られた副詞が、大関（1993）では程度副詞であったのに対して、今回の調査では情態副詞という結果となった。今回の調査で、11種類中8種類以上において取り上げられている副詞（40例）の内訳の比率は、「陳述副詞：程度副詞：様態副詞 = 3.0（12例）：1.75（7例）：5.25（21例）」となり、むしろ、専門教育出版編集部テスト課編（1991）及び甲斐（1983）の副詞の内訳である「陳述副詞：程度副詞：情態副詞 = 3：1：6」に近い結果となった。教科書全体を見渡しても、副詞全体に占める各タイプの内訳の傾向は変わらない。今回の調査対象となった全11種類の教科書において各副詞が占める割合を示すと表4のようになる。

表4. 初級教科書において各副詞が占める割合

タイプ	数
陳述	64 (31.1%)
程度	23 (11.2%)
情態	119 (57.7%)
合計	206 (100%)

表4からも分かるように、情態副詞が占める割合が最も高く、全体として、情態副詞、陳述副詞、程度副詞の順であることに変わりはない。情態副詞の場合、「じろじろ（見る）」、「ぺらぺら（話す）」のように、特定の語と結びつき、使われる場面や話題が制限されることがある。そのため、共通して取り上げられる可能性が低いものも多く、数的にも多くなる傾向があるのは、当然な結果であるとも考えられる。しかし、大関（1993）の調査時と比べると、各種教科書に共通して用いられている情態副詞が増えているということは特徴的である。

多くの教科書に共通して見られる副詞では、程度副詞においても変化が見られる。その一つとして、「たいへん」の扱われ方の変化を挙げることができる。大関（1993）の調査では、調査した初級教科書16冊すべてに共通して見られた副詞として「たいへん」が挙げられていたが、今回、そのような傾向は見られなかった。今回の調査結果では、「たいへん」は11種類のうち4種類の教科書でのみ提示されているのに過ぎなかった。このことから、程度副詞としての「たいへん」は、近年の初級レベルの日本語教科書においては、あまり扱われなくなっていることが分かる。今回、調査対象とした11種類すべての教科書において見られた程度副詞は、「すこし、ちょっと、とても」の3つであり<sup>11</sup>、多くの初級教科書において、程度の修飾は、これら3つの副詞によって行われることが多いということが分かる。

陳述副詞については、今回の調査においても、特定の文法形式と呼応する陳述副詞が多くを占めていた。大関（1993）では、初級教科書では副詞が文型とともに提示される傾向にあり、多くの教科書に共通して扱われている副詞全体において、特定の述語形式と呼応する陳述副詞の比率が高くなっているのはそのためではないかと述べられていたが、今回の調査でもそのような結果となった。8種類以上の教科書において取り上げられていた陳述副詞を、関連する文型の提示の有無によって分類すると、次の表5ようになる。半数以上（12のうち7）が、教科書において、否定、推量、仮定、希望を表す文型とともに導入されているものである。

表5. 8種類以上の教科書において提示されている陳述副詞と文型

文型の提示		副詞
あり	否定	あまり、ぜんぜん、なかなか、そんなに
	推量	たぶん
	仮定	もし
	希望	ぜひ
なし		じつは、たとえば、ちょうど、どうぞ、もちろん

以上を踏まえ、近年の初級日本語教科書において扱われている副詞に見られる傾向をまとめると、次のようになる。

- ①以前に比べ、多くの教科書において共通して見られる情態副詞の種類が増えている。
- ②以前は、「たいへん」が最も多くの初級教科書において共通して取り上げられていた程度副詞であったが、近年、そのような傾向はなくなり、主に「すこし、ちょっと、とても」の3つが程度の修飾を行っている。
- ③陳述副詞は、近年においても、特定の述語形式と呼応するものが共通して取り上げられる傾向にある。

## 5. 副詞の導入に見られる特徴

本節では、今回の調査で副詞を収集する過程で明らかになった、副詞が導入される際の特徴について述べる。主には、形式的な側面と関わる特徴である。今回の調査を通して、同じ副詞であっても、教科書によって提示される際の形に違いが見られることがあるということが分かった。

まず、副詞が単独で示されていることもあれば、共起しやすい他の語句とともに提示されていることがあった。例えば、9種の教科書で導入されている「そろそろ」の場合、「そろそろ失礼します」([みん日])、「そろそろ帰りましょうか」([初歩])、「そろそろ映画が始まりそうですから、中に入りましょう」([語学])のような例文で用いられている。しかしながら、「そろそろ」の扱いは一様ではない。「そろそろ」を単独で取り上げている教科書もあれば、他の語句とともに一つのフレーズとして取り上げている教科書もあった。例えば、[JBP]では、語彙リストにおいて、単独の「そろそろ」だけでなく、「そろそろ失礼します」も提示されていた。[みん日]では、「そろそろ」が単独で示されることはなく、「そろそろ失礼します」のみが挙げられていた。初級レベルの日本語教育で取り上げられている副詞の中には、副詞そのものの理解を促すというよりも、共起しやすい語句とともに提示し、全体で一つのフレーズとして導入しているものがあることが分かる。

次に、形容詞の連用形から転成して副詞として働いているものの提示のされ方においても特徴が見られた。副詞の中には、「よく」、「はやく」のように、形容詞から転成し副詞として機能するものがあり、日本語教科書においても、これら二つについては、「いい」、「はやい」とは別個に取り上げられている。程度を修飾する「す

ごく」も、形容詞「すごい」から転成したものであるが、「すごく」を個別の語彙として取り扱っている教科書は、[げんき]、[JB]のみであった。[初級日]は、本文中においては、「すごく」が程度副詞として使われているものの、語彙としては、形容詞の「すごい」のみが提示されていた。このように、形容詞から転成した副詞の場合、一部の語彙に関しては、教科書によって提示の仕方によらつきがあることが分かる。

また、名詞が格助詞を伴い副詞として働いているものにおいても、扱われ方に違いが見られた。特に、二格やデ格の形をとり副詞として機能する名詞の扱われ方において、違いが顕著に見られた。例えば、「さいご」と「さいごに」、「さき」と「さきに」、「みんな」と「みんなで」のような例がそれに該当する。今回の調査では、「さいご」、「さき」、「みんな」は名詞として扱い、「さいごに」、「さきに」、「みんなで」のみを考察対象としているが、「さいごに」、「さきに」、「みんなで」が、「さいご」、「さき」、「みんな」とは別個に副詞として取り上げられているかどうかは教科書によって異なる。「さいごに」の場合、[JB]、[JBP]では、本文中では用いられていながらも、語彙としては「さいご」のみが提示されていた。また、「さきに」の場合、[みんな日]、[大地]、[初歩]のように、「さきに」を別途取り上げている教科書もあれば、[文化]の場合のように、「さき(に食べる)」のような形で、名詞のような扱いをしている教科書もあった。「みんなで」の扱いも教科書によってばらつきが見られ、[みんな日]、[げんき]のように、「みんな」、「みんなで」を個々に提示しているものもあれば、[JB]のように、「みんな(で)」と提示しているものもあり、提示の仕方によらつきがあることが確認できた。このように、名詞が二格やデ格の形をとって副詞として機能する場合、一つの語彙として導入をするかどうかは教科書によって異なっている。

最後に、「あまり」と「あんまり」、「とても」と「とっても」のように、文体差を有する副詞の扱いにも違いがあることが分かった。ほとんどの教科書が、「あまり」、「とても」のみを扱っていたが、[文化]、[JBP]は、「あんまり」、「とっても」についても、話しことば的であるとしながら、別途取り上げている。

以上、形式面を中心に、導入される際の特徴について述べたが、語彙として別個に取り上げるかどうかは、教科書によって異なっていることが分かる。

## 6. おわりに

本稿では、初級の総合日本語教科書における副詞の導入実態について述べた。具

体的には、導入されている副詞のタイプに見られる特徴、また、形式面の特徴を中心に、新出語彙として扱う際に見られる特徴について述べた。以下、本稿で述べたことをまとめ、今後の課題について述べる。

今回の調査結果では、大関（1993）の調査と類似した結果もあれば、異なる結果もあった。まず、類似した結果として、陳述副詞の導入に見られる特徴を挙げることができる。調査資料や調査方法が同じであるとは言えないため、正確な比較は難しいが、約30年が経った今でも、多くの教科書において共通して見られる陳述副詞は、多くが特定の文型とともに導入されるものであるという傾向が見られた。

次に、異なる結果としては、次の二つを挙げることができる。まず、情態副詞が占める割合である。大関（1993）では、多くの初級教科書において共通して取り上げられている副詞のうち、最も高い割合を占めていたのは程度副詞であったが、今回の調査では情態副詞という結果になった。情態副詞の中には、特定の語と結びつき、用いられる場面や話題が制限されるものもある中、共通して取り扱われるようになってきている情態副詞が増えていることは特徴的であった。野田（2005）では、50年前の初級日本語教科書と現在の初級日本語教科書で取り上げられている文法項目に大きな違いはないとしながら、日本語の教材で取り上げる文法項目にほとんど変化はなかったとしているが、文型を導入するための場面や話題については変化があったのかもしれない。今後、場面や話題も考慮した考察を行っていきいたい<sup>12</sup>。

もう一つの異なる結果は、扱われている程度副詞に見られる変化である。大関（1993）の調査ではすべての初級教科書において見られていた「たいへん」が、今回の調査では11種類のうち4種類のみに見られ、「すこし、ちょっと、とても」の3副詞がすべての教科書において見られるようになっていた。今回は、なぜ「たいへん」があまり扱われなくなってきたのかについてまでは考察することができなかった。「とても」をはじめ、ほかの程度副詞が「たいへん」の役割を担うようになったという可能性も考えられるが、この点についても考察が及んでいない。今後、程度副詞の扱われ方の変化に注目した考察も進めていきたい。

今回の調査では、導入時に見られる形式面の特徴についても述べたが、この点は、何を副詞として扱うかといった、教科書の編集者の文法的な立場とも関わると思われる。このような立場の違いそのものが、学習者の副詞の運用能力に直接的な影響を及ぼすかどうかまでは、現時点では判断できない。しかし、「すごく」のように、単独の語彙としては取り上げられていないものが、本文中では用いられていたり、「さいごで」、「さきに」、「みんなで」のように、名詞が二格やテ格をとって副詞と

して働いているものの扱いが異なっていたりする問題は、学習者の産出に少なからず影響を及ぼすと思われる。今回は、教科書において語彙として取り上げられているかどうかの調査が中心となり、学習者の運用能力との相関性についてまでは検証することができなかった。今後の課題としたい。

## 注

- 1 <http://sakubun.jpn.org/> (最終閲覧日：2019年1月15日)
- 2 初級教科書において取り上げられている文法項目が共通していることについては、野田(2005)において指摘されている。また、岩田(2011)では、初級教科書においては、文法項目だけでなく、その取り扱い方においてもあまり違いがないとの指摘が見られる。副詞の場合、導入される際に、特定の文型とともに示されることがあるため、本調査では、文法項目や取り扱い方において共通する部分の多い初級教科書を調査対象として選定した。
- 3 出版社等、詳細な情報については原稿の末尾にある【調査資料】を参照されたい。
- 4 実際には、品詞情報が示されていないことの方が多い。
- 5 本稿では、いわゆる「形容動詞」も「形容詞」として称する。
- 6 大関(1993)においても、副詞の機能そのものに注目し、従来「副詞」として認められていなかったものについても考察の対象に含んでいるとしている。
- 7 大関(1993)でもこのようなタイプのものは挙げられていなかった。
- 8 「よく」、「ずっと」のように、多義的な副詞で、初級教科書においていずれの用法も取り扱われていた場合については、用法ごとに数えた(今回の調査ではこの2例のみであった)。
- 9 大関1993:26
- 10 副詞の三分類については、大関(1993)での分類を参考に行った。ただし、副詞の定義や分類基準のいずれにおいても詳細な説明がなされていないわけではなく、本調査の基準が大関(1993)の基準と必ずしも同一であったとは断言できない(大関1993では、本調査では時間に関わる副詞として情態副詞として分類している「まだ」が陳述副詞として分類されている)。そのため、ここでは大まかな結果の提示に留めておく。
- 11 大関(1993)の調査結果でも、この3つの副詞は、16冊すべてではなかったものの、「とても」は15冊、「ちょっと」は14冊、「すこし」は13冊で取り扱われて

いた。

- 12 文型を導入する際の場面や話題は、各々の教科書がどのような学習者を想定して書かれたものなのかも関わりがあると思われる。今後考察を進めていく際には、この点についても考慮していきたい。

### 【引用文献】

- 岩田一成 (2011) 「数量表現における初級教材の「傾き」と使用実態」 森篤嗣・庵功雄 (編) 『日本語教育文法のための多様なアプローチ』 ひつじ書房、pp. 101-122.
- 大関真理 (1993) 「日本語学習用教科書の副詞語彙」 『言語文化と日本語教育』 5、お茶の水女子大学日本言語文化学会、pp.23-34.
- 甲斐睦朗 (1983) 「小学校国語教科書の副詞語彙の調査」 渡辺実 (編) 『副用語の研究』 明治書院、pp. 432-452.
- 工藤浩 (1983) 「程度副詞をめぐって」 渡辺実 (編) 『副用語の研究』 明治書院、pp. 176-198.
- 小寺里香 (2001) 「初級～中級学習者の発話に見られる副詞の使用について」 『岐阜大学留学生センター紀要』 2000、岐阜大学、pp.76-89.
- 小矢野哲夫 (1984) 「副用語の指導上の問題点」 『日本語教育』 52、日本語教育学会、pp. 7-18.
- 専門教育出版編集部テスト課編 (1991) 『品詞別・レベル別1万語語彙分類集』 専門教育出版
- 野田尚史 (2005) 「コミュニケーションのための日本語教育文法的设计図」 野田尚史 (編) 『コミュニケーションのための日本語教育文法』 くろしお出版、pp.1-20.

### 【調査資料】

- 『初級 語学留学生のための日本語Ⅰ』 凡人社、2002
- 『初級 語学留学生のための日本語Ⅱ』 凡人社、2002
- 『初級日本語 げんきⅠ (第2版)』 ジャパンタイムズ、2011
- 『初級日本語 げんきⅡ (第2版)』 ジャパンタイムズ、2011
- 『初級日本語 上 (新装改訂版)』 凡人社、2010
- 『初級日本語 下 (新装改訂版)』 凡人社、2010

- 『日本語初級 大地1 メインテキスト』スリーエーネットワーク、2008
- 『日本語初級 大地2 メインテキスト』スリーエーネットワーク、2009
- 『日本語初歩 (改訂版)』凡人社、1997
- 『文化初級日本語Ⅰ テキスト (改訂版)』凡人社、2013
- 『文化初級日本語Ⅱ テキスト (改訂版)』凡人社、2013
- 『みんなの日本語 初級Ⅰ 第2版 本冊』スリーエーネットワーク、2012
- 『みんなの日本語 初級Ⅱ 第2版 本冊』スリーエーネットワーク、2013
- 『JAPANESE FOR EVERYONE (改訂版)』学習研究社、2008
- 『JAPANESE FOR BUSY PEOPLEⅠ (第3版)』講談社USA、2011
- 『JAPANESE FOR BUSY PEOPLEⅡ (第3版)』講談社USA、2011
- 『JAPANESE FOR BUSY PEOPLEⅢ (第3版)』講談社USA、2012
- 『J.BRIDGE FOR BEGINNERS Vol. 1 (第2版)』凡人社、2009
- 『J.BRIDGE FOR BEGINNERS Vol. 2 (第2版)』凡人社、2010
- 『SITUATIONAL FUNCTIONAL JAPANESE Vol. 1 Notes (第2版)』凡人社、1995
- 『SITUATIONAL FUNCTIONAL JAPANESE Vol. 2 Notes (第2版)』凡人社、1994
- 『SITUATIONAL FUNCTIONAL JAPANESE Vol. 3 Notes (第2版)』凡人社、1994

付記：本研究はJSPS科研費JP17K13484の助成を受けたものである。

On the Current Situation of Adverbs Introduced  
in Elementary Japanese Textbooks

PARK Sooyun

This paper investigates how adverbs in elementary Japanese textbooks are currently introduced from the following perspectives; i) what types of adverbs are introduced and ii) how the adverbs are treated when they are introduced. In comparison with the results of a previous study by Ozeki 1993, this paper shows that the adverbs introduced in current elementary Japanese textbooks have the following features.

Firstly, I classified all the adverbs in the textbooks into three types: modal adverbs, adverbs of degree and adverbs of manner, and discovered that there are certain tendencies, as shown below.

- i. The adverbs of manner commonly introduced have increased.
- ii. *taihen* used to be the most popular adverb of degree, but now this tendency has changed and we see, *sukoshi*, *chotto* and *totemo* have occupied this position in current elementary textbooks.
- iii. Modal adverbs that are likely to be introduced in elementary Japanese textbooks are those associated with particular predicates such as *amari/zenzen/nakanaka/sonnani ~nai*, *tabun ~daroo*, *moshi ~tara* and *zehi ~tai*.

Secondly, I pointed out the following features regarding the forms of the adverbs.

- i. Adverbs like *sorosoro* are often introduced with co-occurring phrases which are used with the adverb. (e.g. *sorosoro shitsureishimasu*)
- ii. Some adverbs that were derived from adjectives like *sugoku* tend not to be treated as adverbs in many textbooks.
- iii. The adverbs derived from nouns and particles like *saigoni*, *sakini* and *minnade* are treated differently among textbooks.
- iv. The treatment of colloquial adverbs like *anmari* and *tottemo* diverges among textbooks.